

兄弟のやまぼと

小川未明

青空文庫

「お母^{かあ}さん。これから、また寒い風^{かぜ}が吹^ふいてさびしくなりますね。そして、白^{しろ}く雪^{ゆき}が野原^{のほら}をうずめてしまつて、なにも、私^{わたし}たちの目^めをたのしませるようなものがなくなつてしまふのですね。なんで、お母^{かあ}さんは、こんなさびしいところにすんでいたのでしょうか。」と、子^こばとは、母^{ははおや}親^むに向^むかつていいました。

いままで輝^{かがや}かしかった山^{やま}も、野原^{のほら}も、もはや、冬^{ふゆ}枯^がれてしまひました。そして、哀^{あわ}れな、枝^{えだ}に止^とまつたはとの羽^{はね}にはな^なお寒^{さむ}い北^き風^{かぜ}が吹^ふいているのであります。

「おまえ、こんないいところがどこにあらう。ここにすんでいれ^しばこそ安^{あん}心^{しん}なんだよ。それは、もつと里^{さと}に近^{ちか}い野原^{のほら}にゆけば食

よくもつ
物 もたくさんあるし、おまえたちの喜びよろこそうな花や、流れもなが
あるけれど、すこしも油断ゆだんはできないのだ。ここにはもう長年ながねん
いるけれど、そんな心配しんぱいはすこしもない。それに山やまには、赤くあか
熟じゆくした実みがなっているし、あの山やま一つ越こせば、圃たんぼがあつて、そこ
には私わたしたちの不自由ふじゆうをしないほどの食しゆく物もつも落おちている。こん
ないところかどこにあらう……。けつして、ほかへゆくなどと
思おもつてはならない。」と、母親ははおやは、子こばとたちをいましめたの
であります。

兄きようだい弟だいの子こばとは、はじめのうち、母親ははおやのいうことをほ
んとうだと思おもつて、従したがっていました。しかしだんだん大おおきく、強つよ
くなると、冒険ぼうけんもしてみたかかったのであります。

ある、よく晴れた日のこと、兄弟の子ばとは母の許しを得て山を一つ越して、あちらの圃へゆくことにしました。これまでは、母親がついていったのでした。けれど、めったに、そこには、人の影を見なかつたので、母親は、あすこへならば、たとえ二人をやつてもだいじょうぶであろうと安心したからであります。

二羽の子ばとは、朝日の光を浴びて、巢を離れると、空を高くかに、元気よく飛んでゆきました。そしてやがて、その影を空の中へ没してしまつた時分、母親は、ため息をもらしました。「子供たちの大きくなるのを樂しみにして待つたものだが、大きくなつてしまうと、もはや私から離れていつてしまう……。」

そして、親おやばとは、独ひとり、さびしそうに、巢すのまわりを飛とびまわって、やがて子こ供どもたちの帰かえるのを待まっていたのであります。

二羽わの子こばとは、母は親おやの心こころなどを思おもいませんでした。

「兄にいさん、もつと、どこかへいつてみようじやありませんか。里さとの方ほうへゆかなければ、いいでしょう……。」と、弟おとうとがいました。

「そうだな。海うみの方ほうへゆこうか……。そして、あんまりおそくならないうちに帰かえれば、お母かあさんにしかられることもあるまい。」と、兄あには、さつそく、合ごうい意いしました。二羽わの子こばとは、自じ分ぶんたちのすることおもをすこしもよくないなどとは思おもっていませんから、すぐに、青あおい空そらを翔かけて海うみの方ほうへと飛とんでゆきました。

ようやく、あちらに、輝かがやく海うみが、笑わらっているのが、目めにはいつ

た時分じぶん、どこからか、自分たちを呼ぶよ、はとの声がきこえてきました。

「兄さんにい、どこかで、だれか私わたしたちの仲間が呼んでよいるようですよ。」と、弟おとうとが、兄あにを顧みてかえりいいました。

「ほんとうにな……、どこだろうか？」と、兄あには答こたえました。しかし、兄きょうだい弟だいは、じきに、自分たちの仲間なかまが、海辺うみべの丘おかの上うえで鳴ないているのを知しったので、ただちに、その方ほうへ飛とんでいったのであります。

丘おかの上うえで鳴ないていたはとは、ずっと兄きょうだい弟だいの子こばとよりはきれいであります。兄きょうだい弟だいは、そのはとが、山やま育そだちでなく、自分たちと異ちがって、町まちにすんでいるはとだということことを悟さとったの

であります。

「山やまの方ほうには、なにか珍めづらしい、そして、おもしろいことがありますか。」と、きれいなはとがたずねました。

「いま、赤あかい実みが熟うれています。圃たんぼには、取とり残のこされた豆まめが、まだすこしは落おちているはずです……。」と、山やまからきた、兄あにのほうのはとがいました。

「あなたは、どこからおいでになりました？ つい、これまでお見みかけしたことがありません。」と、弟おとうとが、町まちからきたはとに向むかって聞きいたのであります。

「私わたしは、めつたにこのあたりへはきたことがないので。めづらしく、いいお天てん気きなものですから、海うみを見みようと思おもってきました

。「と、町まちからきたはとは、答こたえました。

それから三羽ぼのはとは、仲なかよく遊あそびました。丘おかをあちらにゆく

と、そこにも豆まめ圃たんぼのあとがあつて、たくさん豆まめが落おちていま

した。兄きょうだい弟この子こばとは、町まちからきたはとに向むかつて、

「さあ、こんなにたくさん豆まめが落おちていますからお拾ひろいなさい。」

といました。

けれど、町まちのはとは、それを拾ひろおうとせず、

「私わたしたちは、毎まい日にち、豆まめや、芋いもは食たべあきています。あなたがた

が、もし私わたしといっしよに町まちへおいでなさしたら、驚おどろきなさるとお

もいます……。」

と、町まちからきたはとは、得とく意いになつていました。

やまの子ばとは、不思議に感じながら、

「町には、どうして、そんなに豆や、芋などがたくさんにあるの

ですか？」

と聞きました。

「みんな人間が、私たちにくれるのです。」

「人間が？」

兄弟の子ばとは、ますます不思議なことに感じたのであり

ます。自分たちは人間をどんなに怖ろしいものに思っているか

しれない。鉄砲を打って、自分たちの命を取るものは、人間

ではないか。自分たちの仲間は、これまで、みんな人間のため

に殺されたのではないか？　そう思うと、町からきたはどのいう

ことは、あまりに意外いがいでなりませんでした。

「人間にんげんは、私わたしたちをかわいがってくれます。そして人間にんげんの子こ供どもは、私わたしたちといっしょに、いつも遊あそんでいます。もし無む法ほうなものがあったて、私わたしたちに石いしを投なげたり、また捕とらえたりするものがあれば、そのものはみんなから罰ばつせられるでありますよう……。町まちにいるほうほうが、どれほど、安あん全ぜんであり、にぎやかであり、愉ゆ快かいであるかわかりません……。もし私わたしといっしょに町まちへおいでなさる気きがあるなら、つれていってあげましょう……。」と、町まちのはとは、兄きょう弟だいに向むかっていいました。

弟おとうとは、すぐにも、いっしょにゆきたいと思おもいましたが、兄あには、お母かあさんが心しん配ぱいなさるだろうと思おもって、考かんえていました。

このとき、白い波が、岸を打つて、こちらのようすをうかがつていましたが、二羽のやまばとが、思案している顔を見て、急に、おかしくなつたとみえて、波は、笑いながら、

「よく考えたがいい。考えてみたがいい……。」と、叫んだのでありました。

「今日は、山のお家へ帰つて、明日、出なおしてきますから、もし、明日、私たちをつれていってくださいれば、このうへの喜びはありません。」と、山のはとはいいました。

町からきたはとは、しんせつないはとでありました。

「そんなら、よく話をしておいでなさい。明日、また私は、ここへきますから。」といつて、その日は、別れてたがいに、山と町

へ帰かえつたのであります。

兄あにおとうとと弟あにおとうとのやまばとは、丘おかを越こえて、山やまの方ほうへと急いそぎました。そこには、哀あわれな母ははおや親ははおやが、枝えだに止とまって、風かぜに吹ふかれながら、子こ供どもらの帰かえるのを待まっていました。

二羽わの子供こどもたちは、帰かえつてきて、今日きょう、町まちのはとにあつて話はなしをしたことを母ははおや親ははおやに告つげたのであります。

「お母かあさん、なぜ私わたしたちも町まちへいつてすまないのですか？」と、兄あにおとうとと弟あにおとうとはいいました。

「いいえ、ここがいちばんいいところです。町まちへなどいつてごらんなさい。一日いちにちだつて安あん心しんしては暮くらせませんよ。」と、母ははお親ははおはいいました。

「だって、お母さん、人間は、町へいけばしんせつで、けつして、捕らえたり、打ち殺すようなことはしないといひます。」と、兄はいいました。

「そして、町では鉄砲で打ったりすると、かえつて、その人間は、みんなから罰せられるということを、町のはとはいひていました。」と、弟がいいました。

母親は、だまつて、二羽の子供のいうことを聞いていひました、
が、

「おまえたちは、そんな着物をきては、町などへゆけません。すぐ、山のはとだということがわかつてしまひます。町の人は、山のはとは、殺してもいいといひことになつてゐるのですよ。」

といたしました。

二羽の子ばとは、なるほど、自分たちの着物が、町のはとにくらべて、たしかに粗末であったことを思い出しました。けれど、母親のいうように、着物の粗末ときれいによつて、殺されたり、殺されなかつたりすることが、あろう道理がないと考えて、母親の言を、そのまま信ずることはできませんでした。そして、翌日になると、町のはとと約束をしたことを思い出して、母親には、じきに帰ってくるからといって、二羽の子ばとは、ふたたび海辺の方を指して飛んできたのであります。

町のはとは、もうとつくに、そこへきて山の兄弟のはとをやつてくるのを待っていました。その日、海の白い波は、気づか

わしげに、三羽ぼのはとのようすをながめていましたが、そのうちに三羽ぼのはとは、町まちの空そらを指さして飛とんでゆきました。

それきり、二羽わの子こばとは、姿すがたを見みせませんでした。町まちにいつて、たくさんの町まちのはとたちに珍めづらしがられて、得意とくいになって、山やまの話はなしをしていたものでしょうか……。兄きょうだい弟だいのようすはわからなかつたのです。その日ひから、山やまでは、母ははおや親おやの子こ供どもを呼よぶ声こゑがさびしく、陰いんき気きに、毎まい日にちのようきに聞きかれました。

半はん月つきもたつた、あらしの過すぎた朝あさのことでした。海うみの波なみは、いつかの二羽わの兄きょうだい弟だいのはとが疲つかれはてて、砂すな原はらに降おりていおむるのを見みました。町まちから、無ぶ事じに帰かえつたものと思おもわれます。

「こんなに、朝あさ早はやくどうしたのですか？」と、波なみは、二羽わの疲つかれ

はてた兄きょうだい弟にいに向むかつてたずねました。

すると、兄あには、だいぶ傷いたんだ翼つばさをくちばしで整ととのえながら、

「町まちの空そらは、真まつ赤かだ。いつか、ここへきたはとも、いままですんでいた寺てらも、みんな焼やけてしまった。私わたしたち二人ふたりは、やつと逃にげて、ここまできた。」と、息いきをせきながら、いいました。

波なみは、この話はなしをきいて、びつくりして、空そらへ跳はね上あがって、か
 なたの空そらを見みようと思いました。

その間あいだに、二羽わのはとは、山やまの方ほうを指さして飛とんでいったのであ
 ります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

底本の親本：「未明童話集 第5巻」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「教育の世紀 4巻1号」

1926（大正15）年1月

※表題は底本では、「兄弟《きょうだい》のやまばと」となっています。

※初出時の表題は「兄弟の山鳩」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2020年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

兄弟のやまぼと

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>